

浜村明德 編著

『地域リハビリテーションプラクシス くらしを支える地域リハビリテーション』

鶴見隆正

(神奈川県立保健福祉大学)

障害や疾病をもつ人と向かい合う理学療法士には、最新の医学的知識・技術はもとより退院後の生活機能を支える諸制度を踏まえた包括的な地域リハビリテーションの視点とその実践能力が求められている。

介護保険制度がはじまって4年が経過した今、その実施形態が大きく変化しようとしている。要介護認定で「要支援」「要介護1」とされた高齢者の著しい増加はサービス給付費の膨大を招き、その一方では所期の目的であった介護状態の改善を達成していないと指摘されている。このため要支援、要介護者の認定見直しと介護予防重視の方針を打ち立て、筋力向上トレーニング、転倒予防訓練、栄養指導、口腔ケアなどの新サービスを加えた「予防訪問介護」「予防通所介護」の実施などが05年から始まるため、行政サイドはその対応に迫られている。

このような時期に地域リハビリテーションの先駆けとして長崎県下はもとよりわが国のリーダーとして長く活躍されている浜村明德先生が編集され、地域リハビリテーションの真髄が込められた本書が出版されたことは実に意義深いことである。本書の真赤な帯封には「21世紀の地域リハ活動のバイブル」「エビデンスにもとづく活動」、「サービスのインテグレイトに向けて」の文言が大きく白抜きに記されており、本書の狙いとするところが端的に表れている。

本書は6章からなり、第1章では「地域リハビリテーション、それはゼロから始まった」として、クライアントの心の叫びを読みとり、草の根的な地域活動の歩みから現在の活動システムについて記載している。

第2章では「なぜ、地域リハビリテーションか」として、医療機関から在宅生活へと移行する際の連携体制と生活重視のアプローチについて記載している。

第3章では「地域活動と国際動向に学び、教えられたこと」として、長崎県下の地域活動の段階的な展開について紹介し、同時に欧州各国の地域活動システムとその現状について記載している。

第4章では「地域リハビリテーション活動のエビデンス」として、地域活動の介入によるニーズへの対応状況、FIMの変化、福祉用具や住宅改修の導入状況などを検証した結果について記載している。

第5章では「パラダイムの変換に向けて」として、障害のある人、その家族を含めた人の価値観の変化、医療・社会諸制度と地域活動との関連、医療の機能分化に対応した活動、介護予防などについて記載している。

第6章では「まちづくりと地域リハビリテーション」として、クライアントの住環境の調整、ボランティアや地域の人材の組織化、医療・保健・福祉の連携体制について記載している。

クライアントのニーズに対する支援を継続実施するためには、地域リハビリテーションの組織化が不可欠である。それにはリーダーの存在も大切であるが、むしろ地域活動の理念を各専門職が共有しながら、活動を高めていく姿勢がポイントになる。その点について本書では、編者らの地域活動への熱い想いに加え、クライアントとその家族を含めた住民組織・医療関係・行政の三位一体となったヒューマンサービスの実践活動が記述されており、地域活動の臨場感が行間から伝わってくる。さらに地域リハビリテーションのエビデンスを追究し、その結果を踏まえながらさらに進化することの大切さを強調しており、その前向きな取り組みに共感を覚える。それだけに本書をじっくり読むことをお勧めする。

地域リハビリテーションの第一線に関わっているセラピスト、ケアマネージャー、行政職の方々には地域リハビリテーションのコアの再確認を、また学生には地域理学療法の奥深さとヒューマンサービスの意義を学びとれる本としてお勧めしたい。

●B5判 図215 表82 286頁
定価(本体3,000円+税)
2004年 医療文化社・刊